

「日・中翻訳演習」を担当して

鈴木 義 昭

筆者は昭和60年度から、早稲田大学語学教育研究所（以下、早大語研と略称する）設置科目の一つである、「日・中翻訳演習」を担当することになった。この科目は後項（〈四〉参照）でも述べるように、日本語教育の分野において、文法的には誤用研究、対照研究の一環であるとともに、作文能力・会話能力の向上を目指したものである。こうした意味ではきわめて広範な幅を持った、総合的な科目と位置づけることができるであろう。ここでは、筆者の早大語研における演習での試行錯誤の跡を報告し、かつ今後の課題・在り方についても考えてみたい。

〈一〉

現在、早大語研には中国・台湾・香港から来た105名の学生が登録しており、うち語研専修生は26名、学部学生は41名、大学院生は37名である。日・中翻訳演習を受講する学生は、以上三カ国の出身者が大多数であるが、中国語に自信のある日本人学生（昭和60年度、聴講生）や台湾留学の経験を持つ韓国人学生（昭和61年度、語研専修生）の参加もある。また、学生たちの専攻は、語研の上級に入学したもの、語研の中級を終了したものがいるのは当然のことではあるが、大学院文学研究科現代日本語コースに在籍しているものを初めとして、各学部・大学院で日本語以外の学科、専修に在学しているものもいる。うち分けは、語研10名（専修生）、第一文学部8名（東洋哲学専修3名、社会学専修1名、美術1名、未定）、政治経済学部2名、文学研究科現代日本語コース1名の計21名となっている。

一方、学外の機関においても同様な科目が設置されているようであるが、その名称はさまざまである。ただ、その箇所数はあまり多くない。大学院では、東京外国語大学大学院・外国語学研究科日本語専攻・個別言語研究、大阪大学大学院・文学研究科日本文学専攻・対照言語学講義（日本語と中国語の対照研究）、大阪外国語大学院・外国語学研究科日本語学専攻・比較語学研究（日本語の類型と他動法）等、大学では、関西大学・日本語Ⅱ（一年次必修 作文・中文日記の書面翻訳）、拓殖大学・留学生別科・作文（各国別に日本語対比による作文指導・中国語作文を含む）等に科目が設けられているだけである。¹⁾

〈二〉

筆者は今年度本演習受講生に対して、次のようなアンケート調査を行なった（別表）。こうした問いに対して、21名の科目登録者中19名の回答があった（3名はアンケート実施当日欠席）。以下、その設問の意図と回答の詳細を報告し、筆者の簡単なコメントを付しておく。なお、(1)～(3)については〈一〉で触れたので省略するが、(2)は学生の母語における方言を考慮したものである。

(4)の「あなたは今、日本語のどんなところに興味がありますか」という設問に対して、延べ28例の回答があった（以下、人数以外はすべて延べ数）が、「すべてに興味がある」というような抽象的な答えを除き、「社会学の翻訳」という具体的なものまで含めて、計8例は「翻訳に対して興味がある」と答えている。次いで、文学（現代小説・詩、その他は単に文学とのみ記入）が4例、文法研究が3例、表現法・語彙が各2例、その他、古典・ことわざ・東北弁・スピード（通訳の速度—筆者）・文体・コピーライト・なしが1例ずつである。本演習が「日・中翻訳演習」と銘打ってある以上、翻訳が上位を占めるであろうことは十分予測されたのであるが、そ

1) 文化庁『国内の日本語教育機関の概要』（凡人社、1985年）による。

別表

- (1) あなたの国籍はどこですか。()
- (2) あなたの育った所はどこですか。(都市名で) ()
- (8) あなたの専攻は何ですか。
()
- (4) あなたは今、日本語のどんなところに興味がありますか。
()
- (5) あなたは将来なにならうと思っていますか。
()
- (6) あなたはどうしてこの科目を選びましたか。
()
- (7) あなたの専攻と関係がありますか。
()
- (8) <「関係ない」と答えた人だけ書いて下さい。>
専攻教科と関係ないのにどうしてこの科目を選びましたか。
()
- (9) あなたはこの科目でなにを特に勉強したいですか。
()
- (10) この科目ではどういうテキストを使ってほしいですか。
()
- (11) この科目での満足度をパーセントで表して下さい。() (多)
- (12) 前期のレポートではなにを書くつもりですか。
()
- (13) その他
()
- 以上

れにしても担当者は彼らの持っている、多岐に亘った興味に対して意を払う必要があるであろう。

(5)の「あなたは将来なにならうと思いますか」という設問に対しては、22例の回答があった。これは前項および後項とも密接な関連を持つもので、意図としては大きく将来の進路についてたずねたものである。奇しくも前項と同じく、8例が「翻訳家あるいは通訳になりたい」と答えている(現代中国語では「翻訳」に翻訳と通訳の両方の意味があるので注意したい)。²⁾

2) 『現代汉语词典』(中国社会科学院语言研究所词典编辑室编・商务印书馆, 1979年・北京)は二つの意を載せる。一つは日本語で言う翻訳(訳本も含む)、今一つは通訳の意。

次いで、「国際交流関係に従事したい」と答えたものが3例あるが、仕事の性質上、上例に含めれば含めることができるであろう。以下、公務員（現在外務省に勤務しているものも合わせて）・日本語教師が各2例、あとは古美術専門家・日本関係の商社員・ジャーナリスト・秘書・農業経営者・未定各1例と続く。

(6)は「あなたはどのようにこの科目を選びましたか」として、本演習の選択理由を聞いてみた。「中国語の水準を向上させたいから」（韓国人学生）や「翻訳科目を受講した経験がないから」といった例を除けば、実際的な通訳・翻訳家の立場からの選択が11例と圧倒的に多かった。次いで、「興味があるから」、「おもしろいから」と答えたものが4例見られたが、これも職業上の必要からの選択と関連しているようである。その他、「日中対照研究の方法を身につけるため」、「日中比較文学を学ぶため」、「日本語らしい日本語を学ぶため」というものが各1例であった。

(7)「あなたの専攻と関係ありますか」と(8)「『関係ない』と答えた人だけ書いて下さい。」専攻教科と関係ないのにどうしてこの科目を選びましたか」とは設問の性質上、同時に眺めてみたい。前者については、「自分の専攻と関係ある」と答えたものが13名、「関係ない」としたものが5名、他に無回答が1名である。この中で回答をしなかったものは文学部の一年生で、専攻がまだ決っていないことによるものと思われる。また、「関係ない」として(8)に回答したものでも、(6)では「日本語教師になりたい」・「国際交流関係に従事したい」としており、大学における専攻と関係ないとはいえ、この科目を通じて日本語を実際に研修しているわけで、新たな専攻を選択したと言えなくもない。一人は生物学専攻、いま一人は日本で初めて大学に入ったものである。残る3名の専攻はそれぞれ、法学・社会学・経済学である。将来の進路についての回答を見ると、順に、韓国外務省派遣専修生・未定者・農業経営者ということになる。

(9)の「なにを特に勉強したいですか」という設問に対して、「特にない」というもの2名、記入のないもの3名の、計5名を除いて、14名が以下の

項目を挙げている。「翻訳の技術」、「翻訳のきまり」の両者を合わせて6例、「日→中の翻訳」が3例、「中→日の翻訳」が2例の、計5例。その他、「読解力の増進」・「小説」・「評論」・「新聞記事」・「手紙の書き方」・「教語」・「助詞・副詞の使い方」・「文法」が各1例ずつである。この設問でもやはり、翻訳・通訳に関する回答が多かった。

(10)の「この科目ではどのようなテキストを使ってほしいですか」については、「不明」が2名、「意見なし」が2名、「レポートを書くだけでいい」とするもの1名の、計5名を除く14名が以下のように答えている。圧倒的に多いのは、「文学関係」(小説・随筆・児童文学を含む)の7例、「幅広く、一般的なもの」の2例、「新聞記事」の2例、あとは「翻訳理論」・「手紙文」・「日中対照のテキスト」(日本語と中国語が原文と対訳の関係になったものか、日中比較語学の専門的テキストかは不明)、「生活関係の文章」と続く。〈四〉で論じるつもりであるが、本演習の理念や個々の学生たちの要求の多様性とも相まって、なかなかむずかしい点があるように思われる。

(11)の「満足度」に関する設問は、アンケートの作成者が実際の担当者であるという点からの不確実性があって、にわかには信を置きがたい。100%満足しているというものから、1%の満足度だという回答があったと報告しておく。なお、1%の学生の回答には、「講義要項のなかに書いた内容と違って、文法ばかりやっていたからです」とのコメントがついていた。学生の要求する事がらと演習の内容が一致しなかった不幸な例と言えるが、これについては〈三〉、〈四〉で触れることにしたい。

(12)の「前期のレポートではなにを書くつもりですか」は、実際の演習に参加して、どういう方面に興味を持ち始めたか、あるいは本演習に触発された点があったかを間接的にたずねた設問で、(4)とも関連を持つ。これには、記入のなかったもの4名、未定のもの6名を除いた11名が回答した。「中国語『的』と日本語『的』について」、「体言『こと・もの・の』の日中対照」などというはっきりしたテーマを持つもの(いずれも現職の日本語

教師)から、「文法以外のもの」(満足度1%と書いた学生)、「社会的なもの」・「生活・人間関係の文章」といったテーマのはっきりしないもの、「私と日本語の出会い」といった作文的なもの、あるいは「日中翻訳」・「児童文学関係」といった漠然としたもの、「授業のまとめ」といった受身的なものなどがある。

(4)「その他」は、以上12の設問に記入し切れなかった事がらを書かせる目的で置いたもので、14名が無記入であった。残る5名のうち、設問の意図を誤解したと思われるもの2名を除いて、3名がそれぞれ、「大学での翻訳科目受講の経験」・「もっとおもしろい、文学的な文章が使った方がいい」(2名)などという意見を寄せてくれた。

なお、60年度受講生に対しては、アンケートの類は実施しなかったが、最初の授業時に書かせた作文によって大略は知ることができる(ただし、正式登録以前)。国籍は台湾8名、中国3名、香港2名である。所属は語研が9名、政治経済学部が2名、文学郎・1名、文研(現代日本語コース)が1名となっている。過半以上のものが日中両語の翻訳に興味を持っており、翻訳家・通訳になりたいと書く。また、この期の学生には、日本思想や日本文化を理解したいとするものが多かった。本年度の受講生にこうした要望が見られなかったのは、本年度から新たにこうした方面を扱う科目が語研にできたからであろう。何を特に学びたいかという点では、「いろんな文章を翻訳したい」・「ニュアンスを美しく正しく翻訳したい」などというものから「口語と書面語(書きことば一筆者)」・「補助動詞について」、「慣用句について」・「使役の日中対照」等を挙げるものもいた。人的構成、日本語に対する興味の度合、学習の中心等、今年度の受講生と比べて、さしたる差異は見られないと考えてもよいではなからうか。以下、昨年度との比較をする場合、こうした認識に立って話を進めてゆきたいと思う。

〈三〉

筆者は本年度の「日本語研修コース案内」に次のように書いた。

本演習は日本語中級コースを履習した中国人学生または中国語のできる外国人留学生を対象とする。本年度は日本語と中国語の文法的な対比を行いながら、翻訳の作業をし、かつその内部に存在する日中両国の文化・歴史等についても考えたい。毎時プリントを用意して行すが、各自、自国で用いた文法書、教科書（日・中両語）の類があったら携行されたい。評価は前・後期各一回ずつ提出されるレポート、および毎時の発表などを通じて行うものとする。

昨年度のそれと比較して大差のない内容であるが、昨年度の反省から、中国のラジオ放送等の聴覚関係のことがらを抜いてある。一週間に一コマという時間的な面、初めてこの科目を担当した筆者の心理的な面での余裕のなさなどから、「コース案内」に掲げながら、一・二回実施するにとどまったため、さしたる効果を挙げ得なかった点を痛感したからである。気分転換的に挿入するものとはかくとして、聞き取り翻訳する作業は別に時間を設けるべきであるとする。以下、昨年度と比較しながら授業内容について報告したい。

昭和60年度に使用したテストは下記のとおりである。

『改編簡約基礎汉语』（香坂・上野改編・光生館、1975年）

司馬遼太郎「美濃浪人」（『世界文学』・人民文学出版社、Vol. 所収）

胡適『胡適留學日記』（商務印書館、1927年）

松井博光『黎明的文学』——中国现实主义作家・茅盾——（『薄明の文学』——中国のリアリズム作家・茅盾——東方選書、1979年。中国語訳は高鵬。浙江人民文学出版社、1982年）

『改編簡約基礎汉语』は日本人学生が中国語の初級段階で学習することが多く、きわめて基礎的なものである。ただ、文法事項が簡にして要を得ているので、これを用いた。また、所謂「普通話」教育のテキストであるため、各方言的地域から来ている学生に対して、基準となる言語を周知・了解させることを目的にしたわけであるが、実際学生たちの日本語能力から考えてみれば、最初の時間にそうしたことは話しておけばよいことである。

演習時には筆者がそれを読み、テキストを見ないで即座に日本語に置き換えることもしたが、そのような通訳練習的なことをやる必要があるかという疑問も残った。一方、文学的なものを、という学生たちの要望が強く、司馬遼太郎「美濃浪人」と胡適『胡適留學日記』を併用することにした。後者は文体がむずかしいという声が出て、「美濃浪人」の方を前期の残り期間を費して行った。筆者としては、大陸系の学生と台湾系の学生ということのを考慮に入れたつもりであったが、できることならば、現代の文章に限定した方がよいという反省を得た。後期に扱った『黎明的文学』もそうであるが、「美濃浪人」は、日本語を中国語になおしたものを、また日本語に改めるという二重の操作をするうちに、原文の持つよさが失われてしまう点に欠陥がある。どちらか一方だけの方がいいと思いつつも判断がつきかねていたというのが実情である。ただ、扱われている時代が幕末維新期であるということもあって、筆者は学生たちに文化的歴史的背景を多く語らなければならなかった点で、逆にその必要性を強調することになった。

以下、前期末のレポートにおけるいくつかの題名を挙げておく。なお、この時は日・中いずれの言葉を用いてもよいことにした。

「『たい』と『たがる』」

「『受身文』の日中対照について」

「漫画『ジャリン子チエ』の翻訳」

「朝日新聞記事『大型小作』の翻訳」

以上、語研専修生

「日譯漢錯句舉例説明」

学部留学生

「日・中可能表現について」

文研学生

その他のものは、中国語を日本語にしたり、日本語を中国語に翻訳する時の例を挙げたものが数点あった。

後期には、テキストの『黎明的文学』を行いながら、前期のレポートをプリントして学生たちに渡し、文字・表現・内容等をめぐって討論した。この方法は学生自身の表現を扱う意味で親近感があり、有効な方法であると思われる。さらに、この期は、2対1ぐらいの割合で、日本語を中国語に改める翻訳作業も行ってみた。例えば、その高鵬訳の

呆在屋子里，很想隔窗向外面望望。现在，外面正笼罩着一片迷雾。

……

という中国語の文章を与えて、それに日本語訳を付けさせる。そして、
部屋の中において、窓ごしに外を眺めているとしょうか。いま外は一面に霧がたちこめている。……

という松井博光『薄明の文学』の該当箇所を提示する。高鵬訳を離れて改めて学生たちに中国語訳をさせてみるわけである。

是不是該從房間裏隔著窗戶往望好呢？外邊現在正籠罩著一層霧。

あるいは、

呆在房间里，心里想着要不要望一望窗外的景色？现在外面罩满着一大片云雾。

等を比較するわけである。こうすることによって、『黎明的文学』で行われた高鵬訳を吟味することができる。ただ、〈四〉で述べるように、レポートを書く時に中国語を使って書くことを許可することと同様に、日本語科書としての枠内で行うこととして適当かどうか疑問を感じた。

なお、後期のレポートには次のようなものがあった。

「窗邊的嘟嘟」（黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』の部分訳）

「『趣味』と『興味』について」——中国語の「興味」・「兴趣」・「趣味」

との比較——

「日中対訳『你好学校』・専用教科書・前言」

以上、語研専修生

「老人問題」（学習研究社『あたらしい日本語』からの抄訳）

「日本語と中国語」

以上、学部留学生
『～た』文の訳し方について』
文研学生
等であった。

〈四〉

さて、昭和61年度に使用したテキストは現在まで、次の二種である。

『汉语语法分析问题』抄（吕叔湘编著・商务印书馆，1979年）

『北京晚报』所載「一分种小说」³⁾

本年度は昨年度の反省から、テキストを頻繁に変えるのではなく、前期は日・中両語の対照研究の基礎とするため、まず中国語文法に関するものを行い、後期は文学関係の作品（なるべく翻訳出版されていないもの）を取り扱うつもりでいた。しかし実際には、アンケートにもあるように、文法的なものばかりでは飽きるということで、少し練り上げて短篇小説を読み始めている。「一分种小说」は短かすぎて、文学的という意味ではもの足りない面も残るかも知れないが、演習の時間的な制限の中で、一まとまりのあるものということで選択した。予定ではこれだけに限らず、台湾系・香港系の学生のために、それぞれの文学的短篇を扱うことにしている。

演習の方法は、本年度も昨年度同様、前もって中国語の文章を与えておき、それを日本語に翻訳させるやり方を採っている。これまでに扱ったものは以下の六篇である。「动词和形容词」（「動詞と形容詞」）・「非谓形容词」（「非述語形容詞」）・「及物 and 不及物动词」（「他動詞と自動詞」）・「主谓短语」（「主述短文」）・「是字句」（「是字文」）・小説「羞涩」（「はじらい」）。言うまでもなく、中国語と日本語にはよく似た部分と全く異なった文とがある。例えば、中国語の動詞と形容詞は日本語と違って、外形からは区別

3) 『北京晚报』は一日おきに「一分种小说」欄を設けているが、大体一分間でも読めるほどの短い小説の意味であろう。本時に扱ったものは、1982年6月17日掲載のもの。作者は冯建国。

ができないことがあり、⁴⁾ そうした点の再確認を行ったのが「動詞和形容詞」、「非謂形容詞」であり、中国語系の学生の一つの欠点である日本語動詞の自・他の区別がしにくい点を考慮して読んだのが「及物和不足物動詞」である。また、「主謂短語」は「主謂謂語句」（「主述述語文」）と係わりを持ち、日本語の「～は～が～」の構文ともよく似ている。⁵⁾ さらに、「是字句」は日本語の「は」と「が」を考える上で重要な構文であると考えて選んだものである。⁶⁾ それに対して、「コース案内」と違うというような意見が出たのは甚だ遺憾であったが、確かにこの演習に翻訳の実作業を期待した学生にとって、毎週文法事項の翻訳は意に反したものであったかも知れない。担当者の意図を徹底すること、どのようにしたら学生に興味を持って文法事項を翻訳させるかということは、今後の課題である。

以下、演習での実例を挙げて報告する。これは「是字句」を扱った時のものである。

是字的最常见的用法是放在两个名词（词或短語）中间。

などと、比較的区切りのよい所で切って、次のような学生たちの翻訳例をプリントにして配る（文字は一言半句もなおさない）。

A: “是” のもっともありふれた使方[▽]は二つの名詞[〰]の（単語、或いは短文）間に置かれる[△]。

B: “是” という字をもっともよく使うのは二つの名詞（詞あるいは短語）の中間です。

C: 是という字は二つの名詞の間（語あるいは短語）の中間です。

D: 「是」という字の最も一般的な使い方は二つの名詞（詞または短

4) たとえば、「紅」は「红花」（赤い花）と「花红了。」（花は赤く咲いた。）と表面上区別を持たない。形容詞と動詞の違いは語順、「了」の有無等で判断しなければならない。

5) 拙論「漢語における『主謂謂語句』について」(1)・(2)参照（早大語研・「ILTNES」・Vol. 77, 78）

6) 拙論「初級文型の日中対照」——「は」と「が」をめぐって——参照（早大語研『講座日本語教育』Vol. 22）

詞)のあいだにおく方法である。

E:「是」という字を二つの名詞(詞或短語)の間に入れるという使い方は、もっともよく見られる。

F:是という字は、最もよく見られる用法は、二つの名詞の間に入る△。

G:是という字の一番よく見かける使い方は二つの名詞(詞あるいは短語)の間に置く△。

~~~~, ♡, ♫等の記号は、その部分に文法的な誤りがあったり、表現として不適当・過不足があったりした場面の注意を示す箇所として筆者が記入したものである。ここに挙げたわずか一行の文でも、かなり多くの誤用が見られる。まず、表記の上からは、「使い方」を「使方」としたもの、「あるいは」をそのまま「或」としたもの、引用符号のない「是」などが指適できる。次いで、詞彙的な面では、「常見」は「よく見る」・「普通の」等の意味であるが、「ありわれた」とまで言ってよいものか。「ありふれた」はマイナスの評価を持っていると思われるが、このコンテキストではそこまで読む必要はないであろう。また、Bのように、「最常见的用法」(「最もよく見られる用法」というのを、「最もよく使う」として、「用法」を動詞に訳すのも無理のように思われる。( )内の「詞」はそのまま詞でよいであろうか。こと文法的な文章を翻訳する時は、その語をよく吟味して用いなければならない。時枝誠記の言う「詞」と混同される惧れも考えられるのである。7)「短語」も同様であって、日本語では「連文」と訳されることが多い。8) 文法の上からは、A・C・F・Gに見られるように、「~の間に置かれる」などと動詞述語文にするのではなくて、形式名詞「こと」をつけて、名詞述語文「~は~だ」にすべきである。これこそ、ここ

7) 時枝誠記流に「詞」と言えば、「辭」と対立した語になるが、中国語ではよく「詞」と「辭」は混同して用いられる。日本語では「語」とすべきであろう。

8) 中国語で「短語」は「詞組」(二字以上の語の組み合わせさせたもの)に同じ。「連文」の訳は香坂『現代中国語辞典』による。

の例文に挙げた「是」字の基本用法であって、日本語の「～は～だ」が「だ」の前に動詞・形容詞を置くことができるのと同様に、中国語も「是」の後に動詞でも形容詞でも置くことができるのである。<sup>9)</sup>あるいは、B「“是”という字を」、F「『是』という文字の」などのように、「ヲ格」・「ハ格」を取ることができるであろうか。Bの場合、先に述べたとおり、「用法」を動詞扱いにしたため、「ヲ」を使わざるを得なかったと言えよう。Fの場合は、単純なミスで「の」を「は」と書き誤ったとも考えられるが、前の「は」の後ろに「、」を用いているからには、「は」を同格の「で」と混同したのかも知れない。あるいは、「的」字句において、「的」は「～という」の意で同格に用いられることがある<sup>10)</sup>ため、『是』字という、最も一般的な用法は……。とするのを誤ったものであろうか。いずれにせよ、『是』という文字の……と、「の」を用いて修体修飾の構文にすべきである。演習時はこうしたさまざまな問題をめぐって討論しながら、誤りをなおしたり、最も適当な表現を捜してゆく方法を採用しているのである。時には、A・B・C等のアルファベットで挙げた学生に実名で登場してもらい、なぜそのような翻訳をしたのかを説明させることがある。

次に「羞澀」を翻訳した時の例を示そう。

眼睛、鼻子、嘴、下額、肩膀……透过镜子，我看见竖在肩膀上的一对刷子，对，就是——土气！ 那好，咱们明儿见。

これを学生たちは次のように訳した。

A：目・鼻・口・下顎・肩と鏡を通して私は肩の上に垂れている二本のおさげに目をとめた。そう、その田舎くさいものだ。よし、明日お別れだよ。

B：目・鼻・口・あご・肩△、鏡を通じて私は肩の上にまっすく立った一対△髪のおさを見た。そうだ、まさに野暮ったい。よし、とにかくあしたに合おう。

9) 注6に同じ。

10) 岸陽子「接尾辞“的”と中国語」(早大語研『講座日本語教育』Vol. 5)

C：目・鼻・口・あごと肩……，鏡を通して一ペアーのブラシが立っ  
ているのを見つけた。そう，これだ，——ダサイ！それでは又明日。

D：目・はな・くちびる・あご・かた，……かがみを通じて，私はか  
たの上に立っている一揃のブラシ（おさげ）を見た。よし，間違  
なく，これだ——あかぬけないヤツだ。あした，オレたちのケリを  
つけるぞ。

E：目・鼻・口・顎・肩……鏡を通して，私は肩にのっている ブラシ  
を見ました。そう，それは——ダサイ恰好。それじゃ，明日またお  
目にかかりましょう。

この短編小説は、髪を切ってパーマをかけようと決心した女性を主人公にして、美容院にあらわれるいろいろな客の、さまざまな態度を描いたものである。Aは中性的文体ではあるが、<sup>11)</sup>なかなかよくまとまっている。それに対して、Bは問題点が多い。「鏡を通じて」は「鏡を通して」（Dも同じ）、「まっすぐ」は「まっすぐ」でなくてはならない。「堅」には「まっすぐにする」、「たてにする」の意味があるが、「髪の毛がまっすぐに立つ」では異常な事態を予想させる。「一對髪の毛さ」は「一對の髪の毛さ」のように「の」を入れるべきであるし、「髪の毛さ」はA・Dの「おさげ」とするのがよい。また「一對」という量詞「対」も、日本語では中国語に限って用法が限定的であるから、<sup>12)</sup>「二本」とする方がよいであろう。Dの「一揃」も同様。「まさに野暮ったい」の「まさに」では少し固すぎるきらいがある。「本当に野暮ったい」ぐらいが適訳かと思われる。「あしたに合おう」は不要な「に」をとって、「あした会おう」とするのがいい（ただし、以下に述べるようにこの訳は不適當）。この小品の主人公は男ではなく、妙齡の娘であって、その娘の独り言であるからは、女性のことばを

11) ここで言う「中性的」とは男女差によらない文体を便宜的にこう呼んだものである。

12) 「対」は元来二つで一組になるものを言うわけだが、中国語ほど広い範囲に使うことができない。「一對の夫婦」、「一對の鸚鵡」というのは若干無理であろう。

使うべきである。訳の上で大きな誤りがないとしても、Dのように、「あかぬけないヤツだ。あした、オレたちのケリをつけるぞ」に至っては、この翻訳は失敗と言えよう。A・Dの「よし」、Aの「だよ」、Bの「そうだ」、「あしたに合おう」等もこの観点に立てば、一考あるべきである。また、D・Eに見られる「ダサイ」は学生たちの間でよく聞かれる一種の流行語であって、それをいち早く翻訳に取り上げた両者の言語感覚は鋭いと言えようが、翻訳の読者、対象を考えた時、問題が出るであろう。もちろん、それが若者対象であるならば、問題はない。なお、原文の「那好、咱们明儿见」については、B・Eの「明日会おう」的な辞書的翻訳をめぐって多くの意見が出された。「また明日、鏡の中の自分に会おう」とするのがB・Eであるのに対して、言葉のニュアンスからの反論である。確かに「明儿见」は「明天见」（明日会おう）ではなくて、「咱们」（われわれ）という言葉が入っていることにより、「決着をつける」意味や、捨て台詞的なニュアンスが含まれる。さらに、その前に「那好」が入っているからには、ある種の決意を訳として表わすべきである。その意味では、Aは「いいわ、明日お別れだから」、Eは「明日かたがつくわ」などと変えればよいであろう。Cの「それでは又明日」は述語を省いた点で、「明日会おう」型と「決着をつける」型の中間的な訳となっている。「じゃまた明日ね」と変えれば、曖昧な形ながら成立するであろう。

この箇所以外では、

第二天一早，我赶到理发店（次の日の朝早く、私は理髮店にかけつけた。）

……”老师傅客气地打断她的话，并让她收起了“喜糖”（……）と老师傅は殷勤に彼女の話のをさえぎって、彼女に“喜糖”をしまわせた。）。

の中の~~~~線部「理发店」・「老师傅」・「喜糖」に論議が集まった。これらはいずれも、日本との生活習慣等の違いにより、訳出しづらい語である。「美容院」という同じ語を使う台湾系学生はいいとして、中国では男女とも「理髮店」に行くわけで、訳例にあるような翻訳では、日本人は多少の

異和感を持つであろう。また、「老师傅」の訳もむずかしい。これには学生たちによる「老先生」・「パーマ屋さん」・「ベテランの美容師」・「古参理容師」・「老理容師」の訳があって、それぞれに違っていた。「師傅」は元来、徒弟制度の中で親方を呼ぶ語であったが、最近では先輩店員・工員を呼ぶのを始めとして、「同志」に代って呼びかけの語として広く一般的に用いられるようになった。<sup>13)</sup>日本でも、美容院で従業員が店の経営者などを先生と呼ぶ習慣があるが、外部のもの（作者）が「先生」と使うことは減多にないであろう。「老先生」は日本語では老年の教師や医師などに使うのが応しい。「古参理容師」・「老理容師」は「理发店」の語に引かれた訳と言うべきであろう。ただし、「古参」は語感が古い。なお、「パーマ屋さん」は基本的には実体を把握しているが、「老」の持つ「年配の」・「老練な」というニュアンスが欠けてしまう。結局、「ベテランの美容師」・「年かさの美容師」というところで落ち着いた。「喜糖」は結婚式などの時に配られる「あめ（キャンディー）」のことであるが、祝いごとの時、日本では砂糖などを配ることはあっても、あめを配る習慣はあまり多くないのではなかろうか。このような文化的背景を持つ言葉を翻訳する時には、それをそのまま出しておいて「喜糖ウエディング（注：祝いごとの時配るあめ）」などのように注で処理することによって、原文の味わいを残す方法もあることを指摘しておいた。

#### 〈五〉

筆者はこれまでに再三に亘って、日・中翻訳演習という言い方をして来た。しかしながら、この言い方は、これまで述べて来た本演習の立場からすれば正確ではない。目標とするところは、日本語を中国語に改めることに在るのではなく、あくまでも日本語教育の一環として、日本語能力の向

---

13) 筆者の北京滞在中、タクシーの運転手から店員まで、あらゆる階層に対して広く用いられていたが、農民とか兵士などのようなはっきり分かる人々に対しては使っていなかった。



上に資する点に在る。すなわち、現在日本語を学習している学生に中国語作文の上達を望むのではなく、中国語の持つニュアンスをいかに多様な日本語に置き換えるかの訓練だからである。したがって、日中両語の完全なバイリンガルでない日本人が日本語を中国語に翻訳する授業を担当すべきではない。この意味では、昨年度日本語を中国語に翻訳するシステムを一時的にでも採った筆者の方法は誤りであった。また逆に、中国人が日本語教育の中で中国語を日本語に翻訳する授業を担当すべきではないと言える。また、「日・中」の語も誤解を招き易い。われわれは日本と他の国とを並べて略称する時、「日中」・「日台」・「日米」などと自国を先にして呼ぶことに慣れてしまっている。語構成の上で、親疎の関係にある時は、親→疎の順で述べるわけである。この意味では機会があれば、「中日翻訳演習」というように、主体がどちらに在るかによって、その位置を改めるべきである。さらに「翻訳研究」という時の「翻訳」の語にしても、〈二〉で述べたように、翻訳と通訳という二義的な意味を持つため、中国人受講生の不要な誤解を避ける点ではこれを用いない方がいい。「日中対照研究」(中日翻訳演習)ぐらいの包括的な呼び方が適当であろう。もし従来のままの名称で行うならば、講座案内等による周知が望まれるわけであるが、〈三〉に述べたように、筆者の「コース案内」も不徹底であった。〈二〉のアンケートで解説したとおり、多くの受講生が通訳の役に立てようとして受講したふしがあるが、ここで言う「翻訳演習」は所謂「通訳養成講座」ではないのである。したがって、どのようにしたら日本語らしい日本語を書き、話す能力を向上させることができるかという主旨に添って種々の訓練はするが、いかにしてよい通訳になれるかという要望に応えるために、この科目が設置されているとは考えない。もちろん、日本語らしい日本語が身につについてゆけば、正確な日文中訳ができるようになるはずである。

以上のような観点に立てば、本演習の持つ範囲はきわめて広範になる。つまり、中国語を日本語に替る際、文字化をすれば作文の能力、音声化をすれば話す能力の向上につながるわけであるし、よりよい文章を書くよう

にすることは表現の研究になる。また、誤った箇所<sup>14)</sup>の訂正と確認を行い、相互に批評し合うことは、誤用研究、文法研究にもなるし、日・中両語の言語的相違からくる種々の現象を説明する意味では、対照言語研究にも通じるわけである。言うまでもないが、日本語で行われる演習に参加し、教師や同級生の発言を聞いたり、自分の意見を主張したりすることは、聴解力を高め、会話力を向上させることに繋がる。そしてさらに、翻訳を行う時、文化的歴史的背景を重視する立場からは、より深い相互理解がもたらされるであろう。上級段階の学生を対象として置かれる所以であるし、筆者が総合的な科目と位置づける所以でもある。

次いでテキストの問題であるが、これまで述べてきたような精神に基づくもので、学生たちの多岐に亘る要求をカバーするようなものは、現在のところないと言ってよいであろう。確かに、日本人の手になる「中国語解釈」の類の参考書は数多く出版されてはいる。これらが中国人学生たちにとってのためにならないとは言わないが、あくまでも日本人の中国語学習者が中国語を日本語に翻訳する際用いられるものであって、中国語系学習者が日本語を学ぶ目的としては編集されていない。総じて、日本語としてなぜこのような表現をするのかという観点<sup>15)</sup>が不足しているわけである。ただ、その中でも今富正巳『中国語→日本語翻訳の要領』(光生館、1973年)は好著であるが、残念ながら収められた項目が少なく、後続が待たれる。<sup>14)</sup>一方、中国でも日文中訳の参考書はかなり多く出版されている。周明主编『日汉翻译教程』(上海外语教育出版社、1984年)はその中でも最もすぐれたものの一つである。〈二〉のアンケート(10)に答えを寄せた学生たちの多くは恐らくそうした日文中訳のテキストを想定したものと思われる。中国の大学等では、翻訳の授業が重視されている。筆者がかつて在職した北京大学日本語科では、「泛读」(速読の意——筆者)の授業の中で日文中訳が行われていたし、ある学年は卒業の前に通訳実習として日本人旅行団に

14) 今富氏は80項目の問題点を本書では17項目だけ掲載したと言う(「翻訳の『要領』について」)。

陪同した。日本でも外国語系学科などで、卒業論文の替りに卒業翻訳を行っているところもあるようであるが、北京大学のある学年では卒業翻訳で卒業論文に替えたことがあった。同時期の他の外国語系大学卒業生も多く卒業翻訳制を採っていた。国家の要請として、実用的な面を重視していることの表れであろうが、日本語を中国語に改めることを主眼としている意味では、本演習の立場とは反対である。しかし、教える側と教えられる側が同国人である場合は母国語を中心にやる以外はない。

筆者のように、毎時プリントを用意するのも一法であるが、もし実際にテキストを作るとすれば、どの方法が考えられるであろうか。学生のアンケート等を参考にして目下考えているのは次のようなものである。年間の授業時数から考えて、二十課ぐらいのボリュームにし、比較的平易なものへと配置する。各課の中国文は新聞・雑誌等から採るのもよいが、日本関係のものなどは日本に滞在したことのあるジャーナリスト・作家・学者に依頼して、ヴァリエーションの豊富なものにできればそれが一番いい。なお、中国語の文体・語彙に注意するのはむろんのこと、中国と台湾の語彙の間に微妙なズレが生じているように思われるので、在籍する学生の構成も配慮すべきであろう。現在のところ、本演習受講者の出身地はほぼ中国・台湾・香港に限られているが、将来は東南アジアの華僑の子弟の参加も当然考えられる。そうした場合、担当者側にも普通話だけでなく、他の方言の知識が要求されることもあろうし、地域別によるクラス編成が望まれるかも知れない。また、本演習には中国系以外にも韓国人・日本人学生も参加しているが、これらの学生を拒否する必要はない。対照研究という意味からすればむしろ歓迎すべきであって、学んだ言葉によって、準普通話系、準広東語系などというふうに組み入れたらよいであろう。また一方、学生たちの日本の大学での専攻についても軽視できない。あるいは、受講生の要望が翻訳研究と対照研究に分かれる可能性もあるので、その対処の方法も考えておかねばならないであろう。

以上、筆者が昨年四月以来担当している「日・中翻訳演習」の授業の報

告とその在り方について述べてきた。関係各位の御教示が戴けたら幸いである。